

沖縄県における魚類養殖の概況

新里 勝也

1. 背景及び概況

沖縄県における魚類養殖は昭和58年頃から本島北部で始まったとされているが、種苗入手の困難さ等の理由により、なかなか定着しなかった。そのような中で昭和63年度から、県栽培漁業センターがマダイの種苗を供給し始めたことなどにより、手掛ける漁家が増えていった。そして平成5年9月の漁業権一斉更新により、区画2件、特定区画58件が設定され、本県の魚類養殖も本格的にスタートしたものと位置づけられている。

当初は成長、歩留まりを向上させることに主眼を置いていた多くの漁家も、この数年来、色、形ともにきれいなマダイが活魚として店頭に並んでいるように、養殖技術はある程度習得され、平準化してきていると思われる。

しかしながら流通面においては、非常に厳しい時期になってきており、特にマダイについては景気後退による需要の減、在庫過多による供給過剰の結果、全国的に価格が低迷し、他県で余ったものが県内の市場（主に量販店等）にまで及んでおり、生産の9割以上をマダイに頼っている県内漁家の経営を圧迫しているのが現状である。

2. 県内の生産状況及び今後の種苗導入計画

平成6年までの経営体数の推移及び生産状況は表-1のとおりである。

生産量は依然としてマダイが圧倒的に多い。移入物の影響もあり完全に県内の市場に定着している。県内物の現在の出荷の主流である平成5年網

入れ魚は、その年の稚魚の大量へい死等による在庫不足で需要（主に活魚）を満たしきれない状況である。したがって、今年の網入れ予定尾数は前年に比べ若干多めの約120万尾が計画されており、経営体数も落ち着いてきており、当面このペースで推移するものと思われる。

ハマフエフキが減少しているのは平成4年に種苗網入れが無かったことによるものであるが、マダイが厳しいなかで種苗の要望は強い。

それぞれの漁家が販売面で頑張っており何とかしのいでいるが、戦略上、魚種のメニューを増やしたいという意向が強く、今後の導入種として、成長が早いとされるカンパチ類やハタ類の期待も非常に強いようである。

3. 今後の課題

魚類養殖をとりまく環境は、さまざまな要因により厳しい状況である。このような時期に事業に取り組んでいくことは、非常に困難なことも多いが、幸い先進県には成功例、失敗例が数多くあり、今後はこれらを参考にしながら養殖業に取り組んでいくことが必要であろう。

表-1 経営体数の推移及び生産状況

養殖種苗需要調査（沖縄県農林水産部）資料

期 間	経営 体数	マ ダ イ			ハ マ フ エ フ キ			魚 類 計			その他の主な魚種
		生産量 kg	生産額 千円	単価 円	生産量 kg	生産額 千円	単価 円	生産量 kg	生産額 千円	単価 円	
H 2.1 ~12月	-	44,582	57,859	1,298	1,950	2,259	1,158	47,927	62,432	1,303	カンパチ、シマアジ、シモフリアイゴ
H 3.1 ~12月	36	125,294	156,252	1,247	10,109	13,316	1,317	157,217	202,081	1,285	シマアジ、シモフリアイゴ、コガネシマアジ
H 4.1 ~12月	35	137,244	168,282	1,226	14,747	18,850	1,278	157,138	192,202	1,223	チンシラー、シモフリアイゴ
H 5.1 ~12月	39	136,677	155,681	1,139	4,971	6,152	1,238	151,492	180,717	1,193	シマアジ、チンシラー、カンパチ
H 6.1 ~12月	39	122,249	142,519	1,166	2,889	3,727	1,290	126,046	148,001	1,174	シマアジ

※ 経営体数：生産（販売）漁家数